

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00775

研究課題名(和文) 英語教育における翻訳タスクの開発と検証

研究課題名(英文) Development and Validation of Translation Tasks in English Language Education

研究代表者

石原 知英 (ISHIHARA, Tomohide)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：80583559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、3種類の翻訳タスク(ピアスピーチ通訳演習、字幕翻訳タスク、仲介的なりテリングタスク)を開発し、それらを活用した実践を行った。また、主に言語習得と仲介能力の育成という2つの観点からその効果の検証を行った。具体的な研究成果として、(1) 読解中の翻訳タスクは偶発的な語彙学習を促すこと、(2) ピアスピーチ通訳演習タスクを通して、通訳不安の低減、通訳のパフォーマンス(特にデリバリの側面)の向上、訳すことの認識の深化が促されること、(3) 仲介的なりテリングタスクを通して仲介方略の使用感が増加すること、(4) 字幕翻訳演習を通して訳に対するイメージに変容が起きること等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、TILTの考え方をベースとした具体的なタスクの例が提案されたこと、またその実践と検証を通して、教室における訳の活用について、その利点と限界の一端が明らかになったことが挙げられる。また、検証の中で、言語習得的な観点に加えて、学習者の訳すことについての認識や、仲介能力の育成(方略の使用)についての検討が進められたことは、これまで英語教育の文脈の中で十分に理解されていない「訳すことは、言語コミュニケーションの一形態(仲介)であり、外国語使用者・学習者に特有の日常的なコミュニケーション行為である」という点についての理解を深めるとともに、これからの英語教育への応用が期待される。

研究成果の概要(英文)：This study developed three types of translation tasks (peer speech interpretation exercises, subtitle translation task, and retelling task) and conducted classroom practices. The effects of these tasks were examined from two perspectives: language acquisition and the development of mediation competence. Specific research findings were that (1) translation tasks during reading promote incidental vocabulary learning, (2) through the peer speech interpretation exercise, interpreting anxiety is reduced, interpreting performance (especially the delivery aspect) is improved, and a deeper awareness of translating is promoted, and (3) the use of mediation strategies increases through retelling tasks, and (4) subtitling and translation exercises lead to a positive change in the image of translation.

研究分野：英語教育学

キーワード：TILT 英語教育 通訳翻訳 仲介

1. 研究開始当初の背景

近年、通訳翻訳研究の分野では、TILT (Translation in Language Teaching) という考え方が注目されている。これは、近年の外国語教授法の中で看過されてきた学習者の母語、とりわけ翻訳活動を言語教育に活用しようという機運であり、世界的には、Cook (2010) *Translation in Language Teaching: An argument for reassessment.* の出版が契機とされる。

TILT の考え方は、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の言語能力観と複言語主義に根差している。その特徴は以下の2点に集約できる。すなわち、訳すことは、言語コミュニケーションの一形態 (仲介, Mediation) であり、外国語使用者・学習者に特有の日常的なコミュニケーション行為である、ということである。この点において、TILT はこれまでの英語教育の文脈で語られる回顧主義的な訳再考の議論 (文構造の把握や精読における補助的役割、あるいは必要悪としての訳読) とは一線を画しているのであるが、この点は英語教育の分野ではこれまで十分に理解されていなかった。

一方で筆者は、これまでの学習者を対象とした通訳翻訳研究の成果から、訳すという活動がことばへの気づきの生起に寄与すること、とりわけ表層的な形式の記銘に正の影響を及ぼすこと、有標な言語的特徴が訳出時の葛藤を引き起こしやすいことなどを明らかにしてきた。また、本研究の予備調査では、訳タスクは内容理解タスクに比べて、文の再認課題の成績が有意に高いことが明らかとなった。これは、訳タスクにおける意味の処理の過程で、並行して形式への焦点化が引き起こされていることを示唆するものである。

これらの背景を踏まえ、本研究課題では、TILT の理念を教室現場で具体化するため、場面と目的を明確にしたコミュニケーションとしての翻訳タスクを開発し、その効果について、言語項目の習得と仲介能力の育成という二つの観点から測定・評価を行うこととした。そうすることで、教室における訳の活用について、その利点と限界を明らかにしようと考えたためである。

2. 研究の目的

本研究では、通訳翻訳研究における TILT の考え方を日本の英語教育研究に適応し、教室現場での具体化および効果の検証をすすめるため、場面や目的を明確にしたコミュニケーションとしての翻訳タスクを開発し、言語習得の観点と仲介能力の育成という二つの観点からその効果の測定・評価を行った。コミュニケーションとしての訳を教室で実現するための具体的なタスクを開発することと、そのタスクがいかに言語習得と仲介能力の育成に寄与するかを実証的に検討すること、という二つの課題に段階的に取り組むことで、日本の英語教育における TILT の利点と限界を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

(1) コミュニケーションを意識した訳タスクの開発

初めに、TILT の考え方をふまえながら、書籍等の資料を参照し、通訳翻訳のプロセスおよび仲介概念を整理するとともに、現在教室で行われている様々な言語活動—とりわけリテリングとストーリーテリング—を精査し、これまでに得られている知見と今後の課題についてまとめた。また、タスクの開発に際しては、対象となる学習者および学習環境 (校種、科目、教室環境、活用できるリソース、クラスサイズ、習熟度など) を考慮しながら、訳のコミュニケーションとしての性質を活かすための、場面に応じた課題の設定や、訳出テキストの選定、具体的な訳出過程における支援などの観点について、中高の現職教員に協力を得ながら議論を重ねた。

この段階で、(a) 字幕作成タスク (英語の動画を素材として、日本語字幕を作成するタスク: 字幕表示のための時間的な制約により、単純な言語転換が不可能である場面が多いこと、また登場人物のセリフを訳すことからコミュニケーションとしての訳を意識しやすいと考えられる) (b) ピアスピーチ通訳演習 (クラスメイトの英語スピーチに対してグループで順番に逐次通訳を行う活動: 聴衆に配慮した表現方法や臨機応変な訳出など、コミュニケーションが強く意識される状況での訳出となると考えられる) (c) 仲介的リテリング活動 (ペアのスピーチをノートテイクをしながら聞き、それを別の相手に英語で伝える活動: 原発話の内容を知らない相手に伝えるという点で仲介的な行為が焦点化されると考えられる) という3種のタスクを実践する準備を整えた。

(2) 訳タスクの実践と効果の検証

次に、上記で開発したタスクについて、言語習得および仲介能力の育成の観点からその効果を検証するための方法を検討した。具体的には、(1) 読解中の翻訳タスクを通して未知語の習得が促されるか、(2) ピアスピーチ通訳演習を通して通訳不安が低減するか、通訳パフォーマンス (特にデリバリの側面) が向上するか、訳の認識が深まるか、(3) 仲介的リテリング活動を通して仲介方略使用やリテリングのスキルが向上するか、(4) 字幕翻訳のタスクを通して訳すことのイメージが変容するか、といった点を検討することとし、それぞれを様々な対象・クラスにおける実践を通して検証した。これらは個別の小テーマとしたため、その方法などについては次節において、結果と合わせて報告する。

4. 研究成果

(1) 読解中の翻訳タスクは内容理解のタスクよりも未知語の習得を促すか

短期大学1年生38名を対象として、英文読解中に内容理解の問題を課す場合と、和訳の問題を課す場合で、未知語の付随的な語彙学習の生じやすさを検討した。また、訳す際の態度(原文志向、訳文志向、原文からの逸脱)によって類型化した場合、その態度が語彙学習に影響を及ぼすかを検討した。

その結果、翻訳課題に含まれていた語の定着度($M = 5.03, SD = 0.88$)のほうが、内容理解課題に含まれていた語の定着度($M = 4.71, SD = 0.52$)よりも有意に高く、効果量は中程度であった($t(37) = 2.09, p = .04, r = .32$)。このことから、内容理解課題よりも翻訳課題のほうが、意味処理中の言語形式への焦点化が惹起しやすいのではないかという示唆を得た。つまり、内容理解の課題においては、一度内容が処理された段階で、語の形式は失われ、既存の文脈と意味的に統合されて解釈される。このプロセスは一般的な読解の処理過程であり、読解における処理強度がそれほど高くない。一方で翻訳課題は、意味の処理だけではなく言語形式の転換を求めることから、タスク中の処理強度が強く、また意味処理と同時に形式への焦点化が引き起こされるため、未知語の形式の記憶が定着しやすいと解釈した。

一方、訳出態度については、訳文の読みやすさや自然さを重視して(一方で原文からある程度離れて自由に)訳すスタイルを持つ者(16名, $M = 5.06, SD = 1.12$)、原文に忠実に訳そうとする(一方で、訳文の読みやすさや自然さをあまり意識しない)者(6名, $M = 4.83, SD = 0.98$)、忠実さを第一義に置きながらも、その範囲内で最大限に読みやすさを実現しようとする者(16名, $M = 5.06, SD = 0.57$)という3類型に分類されたが、それらの志向性は、語彙の定着には影響を及ぼさないようであった($F(2) = 0.16, p = .85$)。

この調査は、言語習得的な側面からのアプローチであったが、翻訳の心得がない、あるいは言語的な習熟度の低い学習者に、いかに言語転換的な訳ではない、コミュニケーションとしての訳をさせるのか、その中でいかにことばへの気づきや訳出における葛藤を促すかについての手立てが課題であると考え、以降の研究は、より仲介的な観点からの検討を行うこととした。

(2) ピアスピーチ通訳演習を通して通訳不安が低減するか

70名の大学生を対象とした初学者向けの通訳クラスにおいて、通常の基礎的な通訳トレーニング(録音された音声や動画を用いたシャドウイング、サイトラ、リプロダクション等の個人練習)に加えて、クラスメイトの自作スピーチを原発話として逐次通訳をするというタスクを継続的にを行い、初学者の通訳不安が低減するか、また通訳のパフォーマンスが向上するかを検討した。

質問紙調査の結果、通訳不安の構造を、先行研究における3因子構造をさらに細分化する形で、授業・クラスに関する不安(F1 クラスメイトや教師からの評価に対する不安、F5 通訳の授業に対する不安)、認知処理に関する不安(F3 原発話の理解に対する不安、F4 訳出時の処理及び産出に対する不安)、通訳能力に関する不安(F2 自分の能力やスキルに対する不安、F6 自分の能力・レベルに関する自信の欠如)という6因子の構造として捉え直すことができた。また、指導を通して、授業およびクラスに関する不安を示すF1とF5、通訳能力に関する不安を示すF2とF6については、初回から中間(基礎的な通訳訓練を行った期間)の変化の差は有意ではなく($F1: p = .44, F2: p = .95, F5: p = .07, F6: p = .18$)、中間から期末(ピアスピーチ通訳演習を行った期間)にかけての変化の差が有意であることが明らかとなった($F1: p < .001, F2: p < .001, F5: p < .001, F6: p < .001$)。この4因子は、認知処理ではなく、情意面に関わる阻害要因であると見做すことができることから、初学者にとってピアスピーチを扱いながら、すなわち、コミュニケーションを強く意識させながら通訳をさせることは、トレーニングへの不安を低減させる効果が期待できると解釈した。また、通訳パフォーマンス自体の向上も見られたが、これについては、不安の低減や指導の効果というよりは、むしろ回数を重ねたことによる効果が強いだろうと解釈した。

(3) ピアスピーチ通訳演習を通してパフォーマンスの向上や訳の認識の変化がみられるか

15名の大学生を対象とした初級者用の通訳クラスの中で、先述したピアスピーチ通訳演習を取り扱い、そのパフォーマンスの向上について、特にデリバリ(音声と振る舞いを中心とした伝わりやすさに関する複合的な要素)の側面から検討を行った。本研究では、通訳パフォーマンスにおけるデリバリの要素を、流暢さ(スピードの適切さや発音の明瞭さ等)、聞きやすさ(言い淀みの少なさや適切な文末イントネーション等)、説得力(アイコンタクトや声量、トーンの適切さ等)の3つの観点として整理し、それぞれの指標ごとに事前と事後のパフォーマンスを評価した。

その結果、流暢さの指標である訳出時間の低下(232.13秒 → 192.87秒)および発話総語数の増加(193.80語 → 234.80語)がみられたこと、聞きやすさの指標である沈黙回数(8.33回 → 2.00回)や言い淀み回数(16.87回 → 9.33回)、不適切な文末の上昇調の生起数(3.07 → 0.73回)の減少がみられたこと、そして、説得力の指標である抑揚やトーンの影響(1.53点 → 3.80点)、アイコンタクトの適切さ(1.20点 → 4.07点)のスコアが向上していることが明らかとなった。

また、毎時間の振り返りとして収集した自由記述のコメントについて、ピアスピーチ通訳演習

を導入する前と後に分けて、特徴語を分析したところ、ピアスピーチ以前の学生らの認識は、「単語を聞きとって訳す作業」、言い換えるなら、言語転換としての訳出という認識であったものから、「アイコンタクトを取りながら聴衆に話す活動」、すなわちコミュニケーションとしての訳出という認識に変化していると解釈できた。これらの結果から、半年間の演習を通して、通訳を言語転換のスキルとしてのみではなく、仲介としての通訳を体験的に学ぶことができたことと解釈した。

(4) 仲介的リテリング活動を通して方略使用感が向上した

短期大学1年生38名を対象として、継続的リテリング活動を行い、仲介方略の使用感の高まりを検討した。リテリング活動の実践の中では、特に実践の後半において、従来行われているような、既習の英文について、お互いに伝え合う(すでに相手の知っている内容を要約する)活動ではなく、ペアのスピーチを聞いて、それを別の相手に伝えるという状況を設定することで、より仲介的な行為が前景化するように配慮した。

5つの仲介方略(既存の知識とつなげて未知の情報を説明する、スタイルやレジスタ等、表現を変えて伝える、複雑な内容を分解して細分化する、難解なテキストを詳細に説明する、テキストを簡素化して伝える)について、事前と事後の使用感の変化を検討したところ、全体的な傾向として、様々な方略を駆使しようとする態度が高まったこと、分かりやすく構成したり、平易に言い換えたり、あるいは省略・強調したりする方略の使用感が高い一方で、相手の既存知識と結びつけて説明したり、原発話に対して詳述化するような方略の使用感が相対的に低いことが明らかとなった。また、実際の発話の様子からも、様々な方略を使いながら話そうとしていることや、事前に比べて事後では、伝えられることが増えたり、相手の反応を引き出しながら伝えようとしている様子が観察された。

これらの結果から、リテリングの活動を継続していく中で、自分の理解の範囲内で簡略化して伝えたり、情報量を減らして伝えるということは、ある程度自然に身についていく一方で、字義的な情報の伝達を越えて、相手の理解を確認しながら、状況に応じてもとのスピーチで明示的に言及されない情報を加えたり詳述したりすることは、単に回数を重ねるだけではなかなかうまくできるようにならないという示唆を得た。これを踏まえて、仲介能力の育成という点からは、とりわけこれらの方略について、さらなる教師の働きかけが必要となると考えた。

(5) 字幕翻訳のタスクを通して訳すことが難しいけれど楽しいというイメージに変容した

高校生62名を対象に、字幕翻訳のワークショップを行い、その前後で、訳す行為に対するイメージがどのように変容するかを検討した。具体的には、グループワークを中心とした体験的なワークショップの中で、言語的な忠実さを主眼とした訳出(素訳)から、字幕の表示時間や文字数などの制限を踏まえつつ、登場人物のセリフとして適切に機能するような訳出(字幕)となるように、段階的なステップを設定した指導を行った。

SD法を用いた質問紙調査の結果、事前の「つまらない」「嫌いな」等といった訳の忌避感を表すイメージは、実践を通してより「面白い」「好きな」といったイメージに変容したこと、その一方で、訳の困難さを示す「難しい」「複雑な」といったイメージは、実践の前後で変化しなかったことが示唆された。

また、事後に行った自由記述の分析からは、「楽しい」「面白い」という言葉と、「難しい」といった言葉が多く生起しており、それらは、「字幕活動の中で英語と日本語を対比させて言葉を工夫するのが楽しい」「素訳を場面に応じて正確かつ適切なものに変えることが大変」「訳すことは難しいと思う」というようなつながりをもって生起しているようであった。字幕翻訳の体験的なワークショップを通して、訳すことのイメージが、単に「難しい」というものから、「難しい」けれど「楽しい」「面白い」という方向に変化したことを踏まえて、言葉の工夫を通して伝えることの難しさや面白さに触れることが、言語教育としての価値があることを指摘した。

以上5つの実践研究を通して、開発したコミュニケーションとしての翻訳タスクの効果について、多角的な検討がなされたことが、本研究課題の成果である。今後は、さらにタスクのバリエーションを増やしていくとともに、仲介能力の育成という点からの効果検証を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山崎美穂・石原知英	4. 巻 24
2. 論文標題 ピアスピーチ通訳演習を通じたデリバリの向上と通訳態度の変化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 通訳翻訳研究への招待	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石原知英	4. 巻 50
2. 論文標題 ピアスピーチのリテリング活動を通じた仲介能力の育成 方略使用に関する認識の変化に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原知英	4. 巻 51
2. 論文標題 高校生の訳す行為に対するイメージの変化 字幕翻訳の体験活動を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原知英	4. 巻 49
2. 論文標題 読解中の翻訳タスクは語彙習得を促進するか 訳出態度との関連から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎美保・石原知英	4. 巻 21
2. 論文標題 ピアスピーチ通訳演習を通じた学習者の通訳不安の解消	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 通訳翻訳研究への招待	6. 最初と最後の頁 69-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 石原知英
2. 発表標題 高校生の訳す行為に対するイメージの変化 字幕翻訳の体験活動を通して
3. 学会等名 第50回九州英語教育学会佐賀研究大会 (佐賀大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石原知英
2. 発表標題 英語教育における仲介能力の位置づけ
3. 学会等名 日本メディア英語学会第75回中部地区研究例会 (オンライン)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山崎美保・石原知英
2. 発表標題 ピアスピーチ通訳演習を通じたデリバリの向上と通訳態度の変化
3. 学会等名 日本通訳翻訳学会第22回年次大会 (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原知英
2. 発表標題 ピアスピーチのリテリング活動を通じた仲介能力の育成：仲介態度の変化に焦点を当てて
3. 学会等名 第49回九州英語教育学会長崎研究大会（オンライン）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関